

特別展「没後 10 年 三岸黄太郎展—描く詩人—」関連ワークショップ

「ざらざらデコボコ絵画をかこう！」を開催しました

日 時：令和元年 11 月 23 日(日祝) ①午前 10～12 時 ②午後 2～4 時

参加人数：①子ども 19 名、保護者 12 名、合計 31 名

②子ども 18 名、保護者 11 名、合計 29 名 ①・②合計：60 名

参加費：300 円(材料費)

講師：稲熊兼氏(ヴェロン會同人、こどもアトリエ主宰)

三岸黄太郎の作品に特徴的なざらついた絵肌を、絵の具に混ぜ物をして体験してもらうプログラムを実施しました。

参加したのは、3 歳～小学生までの子どもたち。稲熊先生が海などで集めてきてくれた砂粒を前に「これから何をやるのかな？」と興味津々です。最初に、稲熊先生から絵の下地を作る手順を聞きます。絵の「下地」をつくってから絵を描くことは、全員初めて。それでも、ジェッソ(乳液状の地塗り剤)に砂粒を練り混ぜて下地剤をつくり、力を入れてナイフで厚紙に塗り込んでいきました。



次に、割り箸等を使って下地に筋をつけたり削ったりし、絵を描いていきます。宇宙や風景、好きなペットなど思い思いの絵を描きました。

下地を乾燥させる間、2階展示室へ行って特別展「没後 10 年 三岸黄太郎展 ― 描く詩人―」を鑑賞しました。稲熊先生は、北フランスの小村ヴェロンにある、三岸節子さんや黄太郎さんが使用したアトリエ兼住居で滞在制作をしたことがあります。その時の経験や、画家として絵を描いてきた経験から「きっと黄太郎さんはこんなふうに絵を描いたと思う」という解説も交えて、皆で絵を見ました



下地が乾いたら、さっそく絵の具を塗っていきます。アクリル系の下地の上に使う絵の具は、アクリル絵の具。下地の味わいが活きるように薄めに溶いたアクリル絵の具を何色か選んで、筆で色を重ねました。「紫を使いたい」という子には、「赤の上に、青を重ねると紫になるよ」等のアドバイスを先生からいただきながら、絵の具の経験が浅い子も一生懸命に制作しました。





感想からは「下地の線が絵の具から浮かび上がってきておもしろかった」、「どうやってザラザラな絵が出来るのかがわかった」、「下地を塗るのは初めてで難しかったけど、できて良かった」などの声が寄せられました。

下地をつくってその上に絵を描くという技法は一見高度ですが、講師の先生の適切な声かけと、画材を工夫することで未就学児でも体験することができました。これからも講師の先生のご経験を活かし、様々な技法を体験できるワークショップを開催して、制作への興味につなげていきたいと考えます。(学芸員 野田)